023734-000-5

97-438

大山案内記（相州）

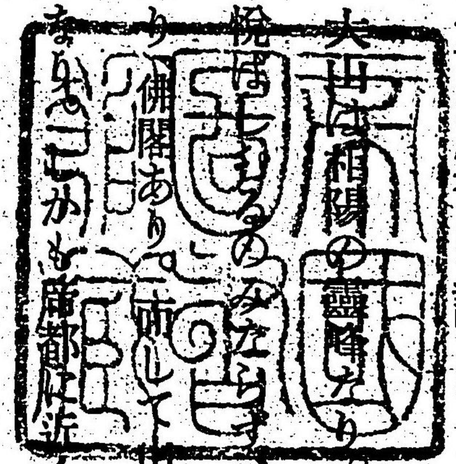
川戸　藤吉／著

M40

ADC-0726

97-438.

大山案内記序



大山は相陽の靈峰なり。その山容の秀麗にして、海道旅客の心を悦ばしむるのみならず、攀登すれば清流あり、飛泉あり、神社あり、佛閣あり。而して山頂の眺望の佳なる、天下に多く見ざる處なり。ここかも京濱紳士淑女の、その日歸りに遊覽すべき仙寰なり。斯る名勝にてありながら、從來その案内記の類なかりしは、遺憾の極みなりき。愛友川戸溪顏氏は、この山麓の人なり。この山に養はれたる詞藻を以て、此の山の地理、歴史を記

川戸藤吉

し、題して大山案内記といふ。記事精確にして詳密まことに好著といふべし。その登山の旅客に便を與ふることの至大なるを喜び、一言すること斯の如し。

明治四十年三月十三日

神奈川縣師範學校教諭

佐藤善治郎識

序

大山は山としては必ずしも高くはない。

併しながら一千二百餘年の古より東國唯一の靈山聖境として登山するもの毎歳實に數十萬を以て算するのである。

本書は是等數十萬の人々に多少資するところあらむとするもので、若し幸に此の書に因つて此の靈山聖境が一層明に、一層廣く世に紹介さるゝならば夫れは著者が望外の喜である。

東都鎌倉河岸の寓居に於て

東京勸業博覽會開會の日

川戸溪韻識

大不動堂

木降雨

杉咀

小言

一大山は一千二百年來の靈地にして現在其の信徒の多き實に關東隨一と稱せらる、而して人の此の地に遊ぶや、毎に一の案内記なきを慨す、著者之を聞くこと寔に久しうして乃ち此の著あり、名けて相州大山案内記といふ。

一本書は名の如く大山の案内記なり。只案内記のみ、大山に關しては著者の不敏なる其の悉くを此の小冊子に盡くす能はず、近く上梓せんとする小著『大山私觀』一篇は正に之を補はんとするものなり。

一本書は之を分ちて總記、各記の二篇となせり。前者に於ては一目の下に大山の如何なるものなりやを瞭然たらしめ、且つ讀者の知らんと欲する事項の索出に便ならしめんとし、後者に於ては專ら登路の順序に從ひ、頁を追ひて之が説明を與へんとしたり。而して附録一篇は登山者に對して聊か著者が用意の

存するところなり。

一書中事實の精說、文辭の銑練を缺けるは稿を忽卒の間に脫せしと、著者の不敏又よく之れを視るに遑あらざりしに因る。大方の叱正を得ば幸なり。

一本書の大成については武靜江、今坂銀次郎兩氏に負ふところ頗る多し、殊に武氏の如きは最初より有益なる材料を寄せられ終始懇篤なる指導を與へられたり。特に茲に書して二氏の厚志に報ゆ。

明治四十年三月

著者撰

相州大山案內記目次

總記

大山の地理……自一頁至一四頁

位置……境界……標高……廣袤……地質……氣象……分峯……溪流……橋梁

瀑布……風景……名跡……自然界……生產……旅館……官公衙

大山の歷史……自一五頁至二六頁

總說……維新前……維新後……先導師……能樂……可美眞道千知……翁明王太郎

神社、佛閣……自二七頁至三一頁

神社

阿夫利神社……攝社……末社……雜社

佛閣

明王寺以下……十ヶ寺

各記

道中案内

平塚より伊勢原に至る……自三一頁…至三四頁
平塚停車場…平塚町……八幡神社……火藥製工場…中原御殿……岡崎城趾
伊勢原より子易明神前に至る……自三四頁…至三七頁
伊勢原町……大福寺……大神宮……一の鳥居……太田道灌の墓

山中案内

大山町……自三七頁…至四七頁
明神前……子易明神社…明神上……子育地藏……姥子如來……子易觀世音……諏訪神社……二の鳥居……大山新町……二ッ橋……別所町…
茶湯寺……觀音寺……小學校……福永町……社務所……閼迦之清水……大瀧……新瀧……三の鳥居……良辨瀧……諏訪神社
五社稻荷……西迎寺……坂本町……元瀧

追分社より下社に至る

追分社……男坂……兜石……夷石……雷山……蝙蝠岩屋
八段瀧……對面石……女坂……爪切地藏……前不動……俱利迦羅
不動……明王寺事務所……寶篋塔……不動堂……大佛……
無明橋……半面石……尾卷石……倉見坂……二重瀧……電瀧……
咀杉……二重社

下社より頂上本宮に至る

……自四七頁…至五五頁
下社……力鈴……腰掛石……神門……鳥居杉……遙拜所…
來光谷……緣結樹……御供水……刈廻……前社……本社……
雨降木……奥社
……自五六頁…至六〇頁

附錄

登山者の注意……六一頁

相州大山案内記目次

畢

里程、旅費……四
先導師新舊名對照表……六五頁
阿夫利神社祭日……六五頁
……七二頁

相州大山案内記

總記

大山の地理

位置　相模國の西北、富士帶の一枝將に東に盡きんとする處に位し、丹澤山脈に屬す。藤澤、茅ケ崎、平塚の各驛より眺め得るナポレオン帽形の山則ち是なり。

境界　山脚『中』『愛甲』の二郡に跨り、東は山勢漸次傾斜して中津山脈に下り、横谷大山町の人家を連ね、餘勢延いて相模平野の西部を展開して高部屋村に接し、西は善波山の小系に分岐して南に長蹉を派して秦野の耕地を抱き、北に丹澤、塔ケ峯の諸峯を連ねて風雅猿語相應答せしめ、山勢低く落つる所其の間水を通じ、水通ずる

川戸溪韻著

處、簑毛、日向、煤ケ谷の諸村落を點ず。

●標高　高さ一千二百十五米突六（明治廿八年調査）にして實に脈中第二の高峯たり、而して山路は麓より八十丁を算して山頂に至るべし。

●廣袤　全面積五百三十九町五反餘にして、此の內官林及官有地に屬するもの二百三十四町二反餘、內神地一町六反餘、寺地一町三反餘、而して民有地に屬するもの三百〇五町二反餘にして、此の內に又神地、墓地、株地等若干を含めり。

●地質　第三紀層に屬し、全山殆ど大山岩（粒狀安山岩、英閃安山岩、輝石安山岩、玄武岩等）より成れり。而して山麓一帶の地は第四紀層に屬す。

●氣象　山中雨甚だ多く、殊に頂上の如きは雲霧常に搖曳して動もすれば沛然として雨を降らす、而して此の雨他に及ばずとなし土俗稱して『私雨』といへり。是れ蓋し太平洋より發せる水蒸氣を含める空氣の漸く陸地に入るに及びて上昇氣流となりて冷却し、已に飽和に達せんとするに加へて冷なる山腹に接觸するか故にして、山肩常に曳となり越となるもの、忽にして百千の銀珠となり沛然として來り下り、紛々として眉額を撲つなり。是を以て東南山麓の地亦雨多く、霖雨閑に飽かしむること決して尠からず。

東國の人、古來大山を歌へば雨を咏じ、大山を語れば必ず先づ雨を談じ來りたるもの亦決して偶然にあらざるなり。山を阿夫利山といへるは蓋し雨降山の意にして文字は只之を音に借りたるものならんのみ。

山中雨多きが故に寒氣の至ること速く、初冬既に雪降りて晩春猶消えず、然れども夏季は最も清涼にして水石明かに、黃鳥樹間に囀ず。大暑山麓に於て九十七八度（華氏）を示せる日と雖も猶ほ晩秋の如く、朝夕は扃を閉ぢ爐を擁し衣を襲ねて而かも寒きを嘆せずんばあらず。

此の故に夏は絶好の避暑地となり、轉療地となり、泉石の間、人間亦夏あるを忘れしむ。

分峰　山は五山六岳の小支に岐る、茲に掲ぐるもの則ち之れなり。(詳説は各記にあり)

雷山　男坂登り右側にある山なり。

笈平　雷山の西方にありて頂上に龍燈の松あり。

石切場　笈平の東南方にあり、往古こゝより石を切出しゝなり。

鐘ケ嶽　石切場の連脈にして、昔頂上に巨鐘を置さたるよりしかいふなり。

櫻山　社務所の後方支脈の別所町に向ひて終るところをいふ。近者公園となすの計わり。

寶珠山　不動堂の在る處をいふ。

淺間山　南方の支脈にして頂上に淺間神社を祀る。

駒ケ岳　池久保、扇平を含む。以前は一面の茅野なりしかど、今は造林盛なり。

堂山　秦野町への通路に當り、老松頗る多く風景甚だ佳なり。

溪流　大山川、丹澤川、仁ヶ久保川、大久保川の四川あり、中につき大山川最も大に、他の三川は皆後に大山川に合す。南東面の登路を爲せる一大溪谷は則ち之れなり。巉岩或は起り或は陷り、其の間互巖細石磊々として清烈限なき水に抗す、水の之れに激すや鏘然として鳴り、閃々として銀珠を吐き、滿山の涼、正に此の一壑に集まるの概あり。橋を架するもの全溪にして十二、時に深潭となりて雲容を抱き、時に急湍となりて山姿を放ち、或は水車をかけ、或は樹影を浸す等清景いふべからす。

橋梁　橋梁は全山を通じ、大小を算して凡べて十二、何れも木橋なり。即ち左の如し。

(登り路順)

二つ橋　大山の入口にあり、二の鳥居より登ること二三町、新町にあり。

新玉橋　新町と別所町との境に架せるものなり。

菖蒲橋　別所町、伊豆屋旅館の傍にあるもの之なり。

籠橋　別所町の中央にあり。

櫻橋　別所町にあり、櫻山の下にして同山より出づる小流に架せるものなり。

轡橋　登路より西に入ること數町、大瀧の入口にあり。

幸橋　福永町の中央、新橋の側にあり。

千代見橋　稻荷町、五社稻荷神社の側にあり。

雲井橋　坂本町の中央、元瀧の傍にあり。

眞玉橋　坂本町の將に盡きんとするところにあり。

紅葉橋　女坂、明王寺の下にあり、側に石地藏あり。

無明橋　不動堂より登ること約一丁の處にあり。

●瀑布　すべて六あり、各獨特の景を以て誇り、山中唯一の壯觀をなす。小なるものは瀧々として瀉ぎ以て天樂の妙韻を傳へ、大なるものは轟轟として直下し、岩角に

に碎けて渦旋盤曲、萬斛の驪珠須臾にして霧を爲す。人の一度走翠風嵐を挾んで此の間に立つもの、衣袂霑ひ吟骨冷え、到底夏あるを忘るべく、一水を掬んで味はゝ水の眞味と人生の涼味とは正にそこに極絶すべけんのみ。（各記に詳說す）

大瀧　登路より西へ三四丁の處にあり。

新瀧　福永町にあり。

良辨瀧　開山町にあり。

元瀧　坂本町にあり。

八段瀧　雷山の麓にあり。

二重瀧　阿夫利神社下社より東へ七八丁の處にあり。

電瀧　二重瀧前の橋下にあり。

●風景　古來大山の風景を說けるもの甚だ多からず、從つて大山の風景亦人に知らること少きか如し、こは全く大山の地理的關係の然らしむるところにして、決して

山に風景なきにあらざるなり。四季を追ひ晴雨に改むる山の遠景、朝夕に望む紫藍の彩美彼の筑波も及ぶべからず、殊に冬夜の山火に至りては之れ見るべからざる大イルミチーションなり。更に歩を山中に擬せんか、水と石とがなせる自然の奇匠、雲霧の去來幽禽の艶語、花木綠草、水韻風籟、一として美ならざるなく快ならざるはなし。更に岩角に踞して下瞰せんか、千里の平蕪廣漠として連れる間、點々たる人家の聚落、白蛇の如く光れる花水、馬入の諸川歷々として指點すべく、江の島、鎌倉の風煙、三浦、房總の半島より、十七里の相模灘、十里の伊豆半島、忽として寸眸に落つ、而して雲一度起らんか、銀雲綿の如く浩蕩として脚下に溺漫して冷風徐に面を拂ひ、人をして羽化登仙の思あらしむ。若し夫れ日出の壯觀に接せんか、忽ちにして神と瞑合し自然と同化し終るべきなり。人の此の壯觀に接せんとし夜を徹して登山するもの〳〵多き誠に故あるなり。彼等の呼んで『御來光』といふもの則ち、

●●名跡　大山の名跡亦地理的關係より古來人文との交渉少かりし爲め甚だ多からずと雖も、之れが一木一石皆宗教的生命を宿せるが故に自らいふべからざる感興を與ふるもの多し。（各記に詳說す）

七つ石　何れも周圍百二十尺内外の巨石にして全山を通じて七つあるよりいふ。昔曾我五郎時致が其の居村曾我山より投けたるものなりと傳ふ。

關伽之清水　櫻山にあり。阿夫利神社社務所の後庭より至るべし。

半面石　女坂の右傍、不動大堂より數町上にあり。

對面石　男坂十三丁目、登り左側にあり。

大佛　不動大堂の右傍、無明橋より下りたる處にあり。

尾卷石　阿夫利神社下社の坂下舊仁王門跡の傍に在り。

仁王門跡　阿夫利神社下社の前面なり。

倉見坂　二重瀧入口の下にある石坂なり。

上屋敷跡　倉見坂の上下左右、中郡忠魂碑の建てる一帯の地なり。

日蓮腰掛石　阿夫利神社下社の背面にあり。

金色仙窟　二重瀧の下方にあり。洞中常に金色を放つといふ。

蝙蝠岩屋　雷山の中腹にあり。

兜石　末社宮比神社の上、即ち男坂五丁目と六丁目との間にあり。

夷石　兜石と相對す。共に其形より名く。

御通道　舊八大坊上屋敷より下屋敷即ち今の社務所に至る間道にして、今の登路と川を隔てたり。蓋し往時に於ける別當八大坊の尊嚴は殆ど全山に行はれたるが故に其の上下の屋敷に往復するや山中の人必ず土下座を以て之に對せるより、其の勞苦を察して此の間道を作りしものなりといふ。

龍燈松　笠平にあり、古、龍燈の登りし松は存せず、今は廣き萱野の中に周圍五六尺、枝葉笠形をなせるものあるを稱せり。

咀杉　二重瀧の傍にあり。

鳥居杉　本坂一丁目（本坂とは下社より上の坂を云ふ）白山社の前にあり。

遙拜所　鳥居杉より上、數間の處にあり。

來光谷　本坂二十丁目、木戸の下にある谷なり。

緣結樹　來光谷の傍、登り左側にある老木なり。

御供水　本坂二十四丁目にある湧泉なり。

雨降木　阿夫利神社頂上本社の前に在る老樹なり。

自然界

山麓は一般によく開拓せられ、春季は黄花、青桑の十里に亘るを見ると雖も漸く登れば竹林頗る多く、又登りて落葉樹の混交林を見るべく、更に登りて針葉林に入るべく、老松古杉亭々として霄漢を摩し、密葉蓊鬱として四時亂れざるの偉

觀を呈す。殊に近時造林の事行はれてよりは山容更に其の美を加へたるが如し。地衣頭上に蒸して百花芳草脚を埋むるか故に動物、植物の採集には頗る恰當の地といふべきか、殊に花摘、草摘の野趣より紅葉、櫻、蕨、茸を狩るの清興に至りては鍬面、禿頭の輩も猶狂すべく、更に天高うして白露冷かなるとき、一頭の犬、一挺の銃、以て岩を踏み水を渉りて草間樹蔭に胸を跳らすも亦興深かるべし。年々鹿、兎、雉子其他の小鳥を其の甕に充たすべく登山する内外人亦頗る多し。

村時雨雨降りの山は松かねの茸も小笠をかざしてぞ出る　梅光

●生産　住民は皆古來の因習よりして刻苦自ら生産するの念に乏しく、從つて其生産物は之を自然の産物に俟つの外多く望むべからず。近時漸く其の非を覺るに至りしと雖も猶古の風を存して拱手事を爲すの實なし。之れ全く宗教上の尊嚴を保つ爲めに出でたる必然の結果にして又必ずしも住民の性情にはあらざるべし。氷豆腐、生茸、蕨、柿、牛蒡、良辨餅、五福菓子、挽物細工、竹細工、表具軸等は其の主なるものなり。

●旅館　先導師ありて其の所屬の信者をして宿泊せしむといへども、之を有せざる登山者は皆旅館によらざるべからず、旅館は皆清潔にして水石雅致を極め、涼風座に充ち長途の疲勞を休むるに足る。宿料何れも三十五錢乃至一圓にして親切丁寧を極め、魚介の新鮮なるもの亦決して乏しからず。（左の表は登り順位）

ものなり。

ゑびや（大津龜太郎）	大山町子易明神前登り左側にあり。	
かみや（鵜川九兵衛）	同上、ゑびや旅館に隣れるもの之なり。	
大津屋（大津利喜造）	同子易明神上、登り右側にあり。	
武本樓（武本喜代馬）	大山町新町、登り右側にあり。	
いづや（小川群藏）	同別所町、登り右側にあり。	
こまや（原菊次郎）	同上、いづや旅館と斜に相對せるもの之なり。	
いづや支店（小川群藏）	同上、こまやと相對して登り右側にあり。	

平野屋（加藤太郎平）　同稻荷町にありて道を挟めり。
歡喜樓（内海　米吉）　同坂本町、登り右側にあり。

官公衙

阿夫利神社社務所　大山町福永町登り右側。舊翠浪閣の地なり。内に神道分局及皇典講究所神奈川縣分所を置き、東京九段坂下に其出張所を設く。

明王寺事務所　前不動の傍にあり。

巡査駐在所　大磯警察署伊勢原分署の派出に係り同新町登左側にあり。

大山町役場　同別所町登り左側、茶湯寺の入口にあり。

大山郵便局　同開山町登り右側にあり。

大山小學校　同別所町、茶湯寺の傍にあり。

大山の歴史

●●總說　大山の歴史は即ち大山を臺舞とせる宗教の歴史にして又之等の宗教上に働ける事物の歴史なり。此の故に社寺の盛衰は直ちに大山の盛衰となり、大山の消長は一に社寺存亡のかゝるところなり、兩々相提携して遂に今日に至れり。

想ふに太古は大山なる地的產物の存在のみにして、人文との交涉甚だ薄く、人類に對して何等の訓化をも與ふるなく、人も亦之に對して何等の感想をも抱かざりしならむ。然れども火山性の山容は竟に人心の弱點を捕促してそこに宗教を抱くに至れり。

古く神を祠り、更に近く佛を加へて遂に東國唯一の靈境聖地となり、數十萬の信徒年々歲々歷落として金剛杖を其の山膚に印し、數千の人之に倚つて衣食するに至れる、また旺なるかな。

維新前　人皇第十代崇神天皇、其の延喜七年に各天社、國社、神社、神戸の八十萬群紳を分ちて諸國に祭り給ふや、我が大山にも一社を置かれたり。延喜式神名帳に相模國十三座として擧げられたるもの、中に阿夫利神社とあるもの即ち之なり。然れども之より前に既に阿夫利神社は存在せしこといふを俟たざるなり。

其の鎭座此の如く遠く、神德亦著しきが故に關東の靈地として早く東北諸國の崇敬を受け、又朝廷の尊崇淺からずして年々祈年の奉幣を賜れり。天平勝寶七年、南都東大寺の別當良辨、五彩の靈光を山頂に認めて直に至りて靈告を得て、楠の神木を以て不動の像を刻み、堂舍、僧坊を造立し、更に之を時の帝、聖武天皇に奏して新に雨降山大山寺を建て、勅願寺となすや、房、總、相三國の租稅を以て之れか諸費に充てられ、こゝに全く行基一派の神佛和光の實を現ずるに至れり。

阿夫利神社を石尊大權現と稱し、山を雨降山を號して大寺を建て、不動尊と合せて大山寺といひ、以て善男善女を招き、堂塔伽藍の美を盡くし、僧侶長袖を誇りて

神官又昔日の俤を遺さゞらんとせり。然れども中道にして僧家大に亂れ、衰退日に甚しからんとせしに加へて慶元三年の大震に堂舍僧坊亦皆灰燼となり了れり。僧安然之が再興を企てゝならず。空しく狐狸の棲地たらんとせしを、曾々鎌倉の聖僧願行上人銳意再興を計りてより又偖觀を收むるに至れり。稍々下りて源賴朝の征夷大將軍となるや、社領を寄附して源氏の祈願所となし、尊崇頗る厚く、足利氏に至りても亦祈願所として尊氏、基氏皆これを尊奉し中にも管領持氏の如きは特に武藏國今井村を本宮に寄進し、上杉朝宗、定正、北條氏康等の武將亦各々神馬、免田を寄進し以て其の武運の永からんを祈れり。德川氏に至つては、家康『東關超絕の名地、天下無双の靈尊』と稱して自ら大に社則を改め朱印、黑印を以て寄進せし社領頗る多く、神地境域の內外に除地山林數百町歩を寄附し、更に三代將軍家光の時に至りては十八萬兩の巨費を投じて本社以下攝社末社等を改築して善美を盡し、爾來事ある時は必らず代參を立て、造營の時には毎に金銀を寄するを例とせり。此の間本社

の火災に罹りて炎上せしもの幾回なるを知らず、從つて其の面目を改むること亦屢〻なりしが、而かも信徒の數と信仰の範圍とは愈々大に益々廣く、幕府の季世には繁盛殆と其の極に達し一千有餘戸の町家一に之れに據りて衣食し、連夜不滅の神燈は山麓四五里に連るに至れり。然れとも不幸にして安政年間の大火に由りて全山悉く烏有に歸して以來又往時の壯觀なきに至れり。

●●●維新後　安政の大火によりて蒙れる大打撃さへあるに更に明治六年、神佛分離の事起りて社寺を改造し、兩者獨立するに至れるより一千二百余年來の宗教的團結こゝに破れていよ〳〵其の復舊に困難を感すること多かりしが、時の社司大教正權田直助翁誠心誠意以て之が任に當り當路の人又之が大業を計りたるより漸く其の面目を改め來り今は關東唯一の靈場として民衆の信奉をうくること頗る厚く、一府九縣に亘る信徒は當に數十萬を以て算すべく、之が講社亦數百の多きを致し、遂に日本遊覽案内に『夏日參詣するもの〻多きは富士山に當らざるべし』といはしめ大日本地

誌をして『大山は關東平野中最も登山行者の雲集するところにして、夏時七八月の候は賽者陸續として跡を絶たず、山谷も之か爲めに埋められんの概あり』と特筆せしむるに至れり。之れ交通の便開け、道路の完全、山路の修築、其の他種々の設備なりて、登山一層容易に朝に東都を發して晝四千二百尺の靈山に長嘯し、夕に銀座街頭の人となり得るに至りたるに因るべしと雖も又以て權田翁が赤誠の結果によらずんばあらざるなり、其の大山の爲めに盡くせるは山人皆翁を呼ぶに母を以てし。口〻に增加し信徒以外の避暑者、轉療者及び山嶽、博物研究の學者學生頗る多く、婦人亦甚だ少しとせず。

加之、近く櫻山には公園設けられんとし下社は拾萬余圓の大工事を以て其擴張に着手し、年々夏季に於て臨時汽車は發せらる。而して近く武相電氣鐵道亦成らんとするに及びては明治に於ける大山の隆昌亦舊觀を凌くものあるを思はずんばあらざる

なり。

●●● 先導師　往古山上に住して修驗と稱せしを慶長十年今の處に下れるなり。俗に御師といふもの之にして其の數凡て百有餘戸（細表は附錄にあり）皆神社に奉仕し、神符の頒布を司る。現時は社司一名社掌二十五名ありて社務所の總務を執行し兼ねて直に神社に奉仕す。他は一府九縣（東京、神奈川、埼玉、千葉、茨城、栃木、群馬、福島、靜岡、山梨）に亘れる各講社、信徒を分掌して、常に其の安寧幸福を祈願し大御神樂の取次神符の頒布を行へり。而して其の信徒との關係は頗る親密にして、右一府九縣の登山者は其の講社員たると否とに拘らず必ず先づ其の所屬先導師の許に宿泊するを例とせり。

由來阿夫利神社には參籠すべき堂宇なく、先導師の居宅を以て之れに充てたり。されば先導師の信徒に對するや頗る親切叮寧を極め、世の黃白を以て事を左右にするものとは全く其の選を異にす。登山中は責任を以て案內其の他各種の便益を與へ

且つ山中苟も事あるときは其の所屬の分明せる限り如何なる遠路と雖も之が出張處辨をなす。之を以て各府縣よりの登山者は先づ社務所につきて各自の所屬先導師（多くは各先導師の門前に所屬府縣の揭示あり）を索め以て之に倚るを最も可なりとす。

●● 能樂　大山の能を知らざるものは未だ以て大山を語るべからず。能は實に大山の一名物にして此の地の誇となすべきものなり。

其の創設は元祿年間にかゝり、爾來毎年二月廿八日には神事と稱して之を行ひ、猶臨時の興行少からざりき。古は能樂を務むるは先導師か職掌上の義務として各々必ず出勤すべき制となり居り、毎年一月其の番組を定め各座に就きて稽古したり。各座又江戶に師家を有し、各々奧儀を極めて其の技を競ひ、維新後一度中絕したりしが、更に明治十四年本社上棟式擧行於ける三日間の擧行は遂に再び之を復活せしめて今の能樂社を組織するに至らしめ再後毎年二回（春三月一日、秋九月八日）宛之を行へり。而して其の社中同志相集りて更に淸吟會を營み、連月素謠、囃子を行

ふ。觀世、森田、幸、金春、大藏等は各座を通ぜる重なる流派なり。

可美眞道千知翁　姓は權田名は直助身を幕末多端の際に起して夙に皇神の學を窮むること深く、又よく醫に通じたり、翁常に稽國盡忠の志あつく、之れが爲めに或は官に任ぜられ或は幽閉の危に遭へること擧げて計ふべからず、而かも其の間書を著すこと數十卷、士を門に養ふこと數十人、眞に吾が明治史上の一偉人たるを失はず殊に明治六年阿夫利神社に奉仕して廢頽其の極に達せる大山を亭け、百方營經以て今日の隆昌を致したる勳勞に至りては吾人之を永世自存の山と共に不滅の歟とせずんばあるべからず、全山の人、翁を以て山の慈母となし、呼ぶに神を以てする亦其の所以なり。碑は今良辨瀧の後方、赤松山に在りて祠宮爵大教正一等學正正七位權田直助可美眞道千人之墓の字を劃し、神道管長正四位子爵稻葉正邦氏額に篆せり

碑　文

源朝臣權田直助大人は武藏國入間郡毛呂本郷の人也祖父休玄翁の代より醫を業とす幼より智深く書讀むを好み手能書れき十七歲の時父直敎ぬしを喪ひ慕哀む事尋常ならず十九歲の時憤を起し吾學未足ず業も精からねば良師に就て問むとて妻を設て母に仕しめ將軍家の侍醫野間廣春院の許に行て三年が間勤勉のさて後四方を行廻て家に歸り再業を開かる廿三歲の時思はれけるに神州の醫にして漢洋の技を假むは快らず惟神なる古醫道をこそ興さめとて平田篤胤翁の弟子となり皇神の道の蘊奧を學明め其外此道の補翼とせむ爲に眼科外治方產科等も遺る隈無く學究て其業日に異に進み其名四方に聞え病る人等遠近より集つゝ旦暮暇無りければ斯ては書を著し道を後世に傳る事能ずとて治療を門人に家事を妻に打委せ一室に指籠りて書を著す事に勞き神遺方經驗抄十卷を作り京に上りて錦小路賴易君に呈られしに君甚賞て序文など賜へり此外古醫道に就て論注されたる書冊部も有べし大人の家は富に非ねど門人又は病客の貧きには衣食を授て敎もし療もせられけりさる間に將軍家の政漸衰へ見聞に堪ぬ事多りければ深く慨憤り人の病は小く國の病は

大也吾其小さを後にし大なるを先にせむとて文久三年の春の初京に上り錦小路五條の諸君を始め廣くまめ人等と交り天皇の大稜威を古に復奉むと事相謀られき慶應三年の秋の末再家を出苅田積穂と名を變て江戸三田なる島津家の邸に入り又京に上り明治元年正月錦旗奉行五條爲榮君に從ひ姫路に抵り二月には岩倉具視君の命に依て江戸に下らる是より先島津邸の亂有て德川家の浪士を追捕る事極て嚴なれば朋友等深く危み頻に留けれども此役こそ天下の大事なれば縱死とも辭可ずとて遂に下て其任を盡さる斯て新き大御代と成ぬれば監察司知事大學中博士從六位皇漢醫道御用掛など云官位に召れしに明治四年の四月嫌疑に依て之を罷られ前田家の邸に幽閉られぬ茲に大人熟世の勢を思ひ古醫道の行難きを知り又後世に遺すべき書も大抵記了たれば此幽閉を好機として語學を講明むと夜晝の別なく勉學び一年許有て免されし後は益之に心を盡さるさて明治六年七月より此阿夫利神社に仕奉り又十二年より十四年迄の間は伊豆國三島神社の宮司ともなり正七位に叙られ敎職は大敎正に至り皇典講究所にては一等學正たり廿一年一月三日より病發て同六月八日此里に歿らる文化六年十二月十七日に生れ此時七十九歲也業を換てより著されたる書神道に係る者凡十種語法に係る者凡廿種孰も天地の眞理に本き論徵されたり大人の母は高麗郡高萩鄕佐久間氏の長女名を久良子と云大人齡五十を踰らるゝ迄恙無りしかば朝夕の事人に委せず皆夫婦にて忠々しく仕られき大人軀幹短く色丹く目口小く鬚髮雪の如く老て腰屈まず強健にて眠る事少し常に曰く書を讀には未明と深更とを用べし人の憩時に勤ずば奚か人に秀る事有むと病に臥も著述を怠らず大人の皇を尊ぶ心の厚さは孝明天皇崩御の折憂歎て病に罹り神を敬ふ心の深きは此山上に登るは更也苟も神を拜むには必沐浴し病中と雖も惰る事無りしにて知べし天性斯の如くにて聊も撓飾るに非れば門人等皆其德に懷きて敬ふ事神の如くなりき大人の妻幾久子は入間郡成瀨村目崎氏女大人に先ちて亡る一男二女あり男は年助即一作の父也長女毛登は飯能村早川舟平に嫁き二女波留は將軍

家の臣倉谷清四郎の妻となれり

明治廿一年三月　神道管長正四位子爵稻葉正邦君篆額

門人　井上賴國謹撰　同　阪　正臣謹書

●●●

攝社

八心思兼神社　男坂、女坂の分岐點にあり、一つに近分社といふ。

二重神社　二重瀧の傍にありて高龗神を祀る。

雷山神社　雷山の頂にありて大雷神を祀る。

末社（凡て廿六、皆男坂の兩側に點在す）

大新神社　菅原神社　大地主神社

火産靈神社　戸積神社　須世理姫神社

猿田彦神社　鹿島神社　葛城神社

八幡神社　鹽竈神社　素盞男神社

竈神社　雷山神社　春日神社

御井神社　宮比神社　大國主神社

琴平神社　少彦名神社　淡島神社

嚴島神社　春日神社　德一社

八天社　風雨神社

雜社

諏訪神社　明神上にありて上子易の氏神なり。

五社稻荷　稻荷町にあり、一に五大力稻荷といふ。

根神社　坂本町にあり。

諏訪神社　開山町登り左側にあり。

愛宕神社　松尾神社といひ福永町にあり。

皇產靈神社　別所町にあり。

比々多神社　所謂子易明神之なり。

佛閣

明王寺　寶珠山にあり、不動堂是なり。
前不動　明王寺事務所の傍にあり。
倶利加羅不動　前不動堂の傍にあり。
成就庵　坂本町登り左側にあり。
西迎寺　稲荷町にあり。
西岸寺　別所町にあり。一に茶湯寺といふ。
觀音寺　同上登り左側にあり。
觀音堂　上子易明神上にあり。
姥子堂　同上觀音堂の傍にあり。
子育地藏　同上登り右側にあり。

各記

（道中案内）

一平塚より伊勢原に至る

（大山登山者にして東海道鐵道に寄るものは必ず平塚に下車せざるべからず。）

●●●●平塚停車場　東京を距る約十五里、新橋より二時間にして至るべく、夏季大祭の折には國府津迄往復四回の臨時汽車發せらるゝが故に登山者の至便又いふべからず。而して皆此の一停車場に集散す。

停車場の所在を新宿といふ。松林多くして空氣清く、白砂を踏むこと數丁にして海濱に至るべく、湘南の風光眞に數旬の清興に値す。林中佐々木病院あり、而して近時別莊の起るもの亦甚だ多きを加ふ。現今の停車場は明治三十八年の改築に係る。

平常といへども厚木、伊勢原、秦野寺、相模平野中央の各邑に至る旅客、貨物一に

茲に集散するが故に頗る賑へり。旅館に松本、内河、富士見屋、太田屋、角屋等あり。

●●●平塚町　新宿より西方大磯に向つて人家の櫛比するもの之にして人口三千餘、遊廓、小學校、巡査駐在所、平塚銀行、江陽銀行(新宿)等あり。昔時は五十三次の一として頗る繁盛を極め旅館實に四十八を算したりと雖も、今は頗る振はず、農商共に見るべきものなく、古雅なる人家僅に古の俤を存せるのみ、然れども近時附近に工場等の起るもの漸く多からんとせるが故に、將來に於いて多大の發達をなさんこと難きにあらざるべし。

上洛の途にて

あはれてふ誰が世のしるし朽ちはてゝかたみも見えす平塚の里　道灌

山かへりとまりにつきて打ちならす手の平塚の宿や賑はし　三千蔭

是より伊勢原町を經て大山に至るべし、伊勢原町迄二里強、道路平垣、人力車、馬車(賃銀、時間等は附錄にあり)或は徒歩其の健脚を試むも亦興あらむ。

●●●八幡神社　停車場を出發して約八丁、道の正面に當りて丹壁松翠の間に隱見するもの是なり。大門海岸に通ず。平塚、八幡、馬入の鎭守にして相模五社の一なり、祭神は應神天皇にして神體秘して開扉せず、建久三年右大將賴朝其の室政子の安産を祈りて神馬を獻せしことあり。

梓弓八幡をこゝにぬかづぬさぬ春は惠の山に待ちみむ　准后道興

●●●●火藥製造所　松林を超えて右に廣壯なる大工場あるは之なり。英國アームストロング會社の經營にして明治三十八年起工し今猶施設中に屬す、敷地約二十餘萬坪、我海軍の爲に火藥を製造するものにして將來は我が海軍省の有に歸すべきものなりといふ。此地を過ぐれば大山西方連山の中に屹立して我を招く、左右一帶の砂地にして頗る甘蔗の栽培に適す、所謂「中原甘蔗」の所產地たる中原村に對す。

●●●中原御殿　一に雲雀野御殿と稱せしもの村の中央に位し、大山道に沿ひて僅に其の

跡を存す。附近の地を「今御殿」と呼ぶ。慶長年中徳川家康が鷹狩の際の宿所にして當時は頗る莊麗を極め濠其の四周を繞れりといふ。

之より暫く花水川に沿ひ、豊田を過ぎ右折して矢崎、大句等を經、此の間芭蕉の所謂「草洗ふ女西行ならば歌よまむ」の活趣を味ふべし。

●岡崎城趾　岡崎村馬渡にあり。道に沿ひて無量寺といへるは本丸の趾に位して同寺は今に其の記錄を藏すといふ。四邊密樹暗く塹濠彷彿たり。治承の昔、三浦大助義明の弟岡崎四郎義實の居城たりし處なり。附近一帶の地、皆之れ往古海螺響き旌旗の飜へりし處にして關東武士の鋭乃今地下に銹びて夏草ひとり兵者共が夢の跡を語る。是より約二十町にして伊勢原に至るべし。

伊勢原町より明神前に至る

●伊勢原町　伊勢原、田中、大竹、板戸、池端の五部に分る、參詣の道にあたりて人家櫛比するは伊勢原の地なり。元和年中伊勢の人茲に來りて地を開きしが、其の故國を慕ふの餘り、遂に此處に太神宮を祀れるに始まりといふ。大山登山の要路に當り且つ大山に對する供給は凡べて此の町にてなせるが故に市街繁盛にして人口四千余、商業甚だ盛なり。然りと雖も地に企業の見るべきものなく其の進歩の遲々たるを遺憾とす。小學校、裁判所出張所、郵便電信局、葉煙草專賣局出張所、警察分署、町役場、伊勢原銀行、日本肥料會社、江山堂眼科醫院、伊勢原美普教會等あり旅館に松屋、伊勢屋、小宮樓、玉川樓等ありて何れも親切叮寧を極めざるなく、殊に登山者に對しては各種の便利を與へ居れり。武相電鐵又近く此の地を通ぜんとす

●大福寺　町の中央に大門ありて入るべし、田廣山最勝院と號し、大福寺の名最もよく著はる。淨土宗にして芝增上寺に屬し元和六年の草立なり。堂宇頗る見るべく本尊の彌陀は聖徳太子の作なりといふ。境内楠の大木ありて約四丈を周る。

●太神宮　大福寺を距る二丁餘の右側にあり。神籬寂びて林籟凉を吹く、伊勢の神廟に摸して内宮、外宮の二となし廿一年毎に之が修築をなす。祭典は四月、九月にし

て相撲興行を以て知らる。

過ぎて高部屋村に入る、茅屋二三、點在するところは其の小字峯岸なり。道路平にして爽、車行甚だ快なり。左に大磯の高麗山を眺め、右に透迤たる煤ケ谷、日向の諸山を望む、而して大山愈々近く、翠壁眉間に迫るの概あり。

一の鳥居　阿夫利神社第一の鳥居にして所在を七五三引といふ。花崗岩の大鳥居にして高さ二丈餘、嘉永四年の建設なり。傍に當村の鎮守五靈神社あり。

こゝを過ぐれば山王原なり。杉並木を右に入れば小社あり。山王神社と呼び山王原の鎮守なり。

道灌の墓　山王神社より野徑を履むこと僅にして一寺あり洞昌院といふ。境内に五輪の塔ありて二本の老松に蓋はるゝもの即ち道灌の墓なり、高さ三尺五寸餘、苔深く蒸して全形辨ずべからずといへども想ふに當時のものにはあらざるべし。

道灌は備中守太田資清の子にして左衛門尉大夫持資と稱し、入道して道灌と號す相模の人にして鎌倉管領上杉定正に屬して夙に文武兼備の令名高く、東西の將士靡然として心を是に傾けたり。長祿元年江戸、川越、岩槻の三城を築けり。道灌軍法に通ずること極めて深く人の之を師範とせるもの亦甚だ多し而して又よく和歌に通じ「七重八重」の歌最もよく知らる。其の一生譎に遇ひて害せらるゝや「かゝるときさこそ命の惜しからめかねてなき身と思知らずは」の一首を詠じて悠容死につけり時に文明十八年、而して良將今黄土の下に眠りて聲なし、心あるもの訪はずして可ならんや。

本道に戻りて石倉橋を渡れば四顧の景こゝより改まり水聲早く涼を誘ふ。右にあるを自性寺といふ。馬車こゝに至りて止む。

山中案内

大山町

●●●大山町　天平勝寶七年僧良辨、大山寺創立の時より開けたりと傳ふれども、是より先既に阿夫利神社に奉始せるもの相集りて自ら今の大山町の基礎を作りしことゝいふを俟たず、然れども町としての體裁をなすに至りしは全く良辨開山以後の事に屬するもの〻如し。

而して當時の大山町は其の繁盛今日の如きものにあらずして、美々たる堂塔伽籃整然として白雲の表を摩し、神官僧侶の紫衣赤袍亦翠綠の間に隱見して寔に靈香いふべからざる一盞天を爲せる者の如く、『大山千軒』の人屋は之れを慕ひて登山する善男善女によりて各々其の家を修め、其の榮を恣にして頗る見るべきものありしといへども安政の大火不幸にして山中の全部を烏有に歸せしめたるより復た舊觀の壯を見る能はず、近時町民の奮勵により漸く其の面目を改めて今日に至れり。

全町を通じて人口二千五百餘戸數四百余にして內百余戸の先導師を有す。而して今は之を子易と大山との二に大別し更に子易を分ちて下子易、町屋、上子易の三となし、大山を分ちて新町、別所町、福永町、開山町、稻荷町、坂本町の六に區分せり。(詳說は總記にしたれば茲に贅せず)

●●●明神前　これより大山町なり。一に下子易といひ、明神前は其俗稱なり、蓋し此の地子易明神社あるが故なり。戸數六十餘、かみや、ゑびやの二旅館あり、小婢紅裙を飜して共に客を呼ぶ。こゝより上は人力車至らず、馬と山駕とは以て僅に通ずべし。

●●●●●子易明神社　道の正面高き處にある社にして、正しくは毘々多神社といふ。延喜式內の社なりといへど約一里を隔てゝ比々多村に比々多神社あれば何れとも分き難し神吾田鹿葦津姫命(木花咲耶姫)を祭り、丹壁青瓦古色掬すべく、境內老樟二あり、共に神木なり。

御拜の柱、丸揚子の如くなれるは、此の柱の屑を煎じて產婦に用ゐるときは安產すといふより參詣の人來つて削去るが故なり。是より上を町屋といふ。

明神上　所謂上子易の地にして明神社より上町屋及び二の鳥居迄の間をいふ。皆磴道なり。階を追うて漸く其の急を加ふるや、水聲耳に充ち嵐氣肌を犯す附近柿樹多く『此の村は柿百本に五戸の家』以上の俳趣を見るべし。此の地柿と午蒡とに名あり。

子易觀世音　此の堂も亦一年を隔てゝ炎上し、今は方圓の石の布置只亂草の間に往時を追想せしむるのみ。傍に自然石の大手水鉢あり。

觀世音居ます子易は燕の雛をやすくぞ育てゆくらん　　梅彦

僅に登りて右に大津屋旅館あり。後庭に池あり、池に滝あり、常に轔轔の聲をなして涼を呼ぶ。前に長坂あり逗子坂といふ。

諏訪神社　上子易の鎭守にして社地急坂の上に位し、建御方神を祭る。雜社なり。境内に數百年を經たる樟の大樹あり。神木なり。

二の鳥居　木造なり。明治七年十月の建設にかゝり、之より上を所謂大山となす。

（舊鳥居は青銅製にして、傍に大山、子易の境木ありしといふ。）

新町

鳥居をくぐれば新町に入る。行くこと僅にして二つ橋あり。

●●●二つ橋　古は板二枚を渡しかけたればかくよべるなりといふ。水は大久保より來る。文明年中、淮后源道興此の橋を渡りて首せり。

おほつかな流れもわかぬ川水にかけならべたる二つ橋かな。

此の附近の地一帶を亦二つ橋と呼ぶ。橋畔に稻荷の小祠あり、之より左に巡査駐在所を見て登れば同じ側に竹本旅館あり。更に新玉橋を渡れば別所町なり。

別所町

大山川の清流に沿うて右折すれば左側に町役場あり。

●●●茶湯寺　町役場の傍を左折して右折すれば左側に登るべし。大岌山西岸寺といふ。茶湯寺は以前此の寺の上にありしが明治元年燒失の厄に遭ひて茲に移りしより人其の本名を呼ばずして茶湯寺といふなり。安置せる釋迦入滅の像は長さ一間二尺餘、水戸の海中より獲たるものにて樟なりといふ。近郷の人死者あるときは其の百一日目に此の寺に詣でゝ茶湯供養をなし、然る後各所の神佛に詣づるを例とす。茶湯寺の名亦是より起れりと傳ふ。

●●●觀音寺　茶湯寺の境内にありて十一面觀世音を安置す。雨降山の本地佛として元頂上にありしを神佛分離のときこゝに移せしもの、尚も之を犯すときは明を失ふとなし秘して開扉せず。傳へて光明皇后の作なりといふ。

●●●大山小學校　觀音寺と垣を隔てゝあり。尋常、高等併置にして武靜江氏之が校長たり、新任以來德望を以て鳴り、兒童の成績亦甚だ見るべく、縣下有數の良果を示せり。

福永町

登れば二層の大樓道の兩側に聳立す、右なるを『いづや』といひ左なるを『こまや』といふ、共に大山唯一の旅館にして前者は後庭直ちに大山川の淸石を掬すべく、後

者は尺前直に靈山の翠美を味ふべし。各室宏荘にして清潔、客に對する亦親切懇篤を極む。いづや支店を右に折れて蒲橋を過ぎ霞橋を渡り、更に櫻橋を超ゆれば一丁にして社務所に至る。

●社務所　登右側なり。此の地は古下屋敷と稱して大山寺別當の住せしところなり。今の建物はもと翠浪閣と稱せしものにして風景頗る絶佳、大山の勝景殆ど此處に盡くといへり。社司中教正内海景弓氏、社掌權中講義今坂銀次郎氏以下二十五名おりて各々之に執勢し一切の社務を扱へり。所中に神道分局、皇典講究所神奈川縣分所を置き、更に本所出張所を東京九段中坂下に置く。

●閼伽の清水　櫻山にありて社務所の後庭より至るべし。古松老柏翁鬱として修竹の間巉岩苔に寂ふるところ一水の綠壁を溶いて滴るもの是なり。涿溜して一條の飛泉となり巖を傳うて閣の庭池に落つ。幽趣掬すべし。

●大瀧　登路より『大瀧道』の石標を左に入ること三丁餘にして至るべし。高さ三丈餘巾一丈二尺、駒ケ嶽より來る水こゝに銀河九天の壯景をなすなり。傍に堂あり、倶利迦羅不動の像を安置す。瀧守は武田水穗氏にして瀧淵坊と稱す。土俗今猶瀧上に大蛇住めりとなせり。

●新瀧　高さ二丈二尺、石を疊みて底となし、瀧上左右に倶利迦羅不動の像を置く。傍に愛宕神社あり、故に又愛宕瀧ともいふ。境内松尾神社あり、瀧守を柏崎松五郎氏となす。

開山町

●三の鳥居　幸橋を渡り、溪谷に沿うて登れば右に大山郵便局あり。之より幾何もなくして青銅の大鳥居を見る、之阿夫利神社第三の鳥居にして東郡を比企氏の建つるところなり。

●良辨瀧　鳥居を入りて右に鐵橋を渡りて至る。密樹天を掩ふ處、青銅の大蛇吻を麗

珠を跳らせ、銀簾を吐く、高さ三丈、巾三尺餘、冷寒人をして慄然たらしむ。瀧上に良辨堂ありて良辨幼時の像（自作の）を安す。傳云ふ良辨開山の折、此の瀧にて六根を清めたりと、境内に秡戸四柱神社を祭り、瀧守を龜井正繩氏となす。瀧の入口に石像の大獅子一對、銅製の大提燈一對あり、共に頗る精巧を極む。坂上に良辨の餅屋あり、名物『五福菓子』を賣る。

●諏訪神社　開山町の鎮守にして良辨瀧と斜に相對す。祭神は建御方神にして永仁三年の勸請なり。毎年七月廿七日社地に青茅を結びて當山の諸神に供ふるを例とす境内銀杏の神木あり。

●五社稻荷　一に五大力稻荷といひ、倉稻魂命、大己貴命、太田命、大宮姫命、保食神を祀る、社殿槻と銀杏の神木に擁せらる。傍の橋を千代見橋といひ、右に見ゆる山を石尊山といふ。

●西迎寺　豆腐の料理を以て其の名を知られたる平野屋旅館を過ぎ橋を渡れば僅にして至るべし。誓正山、引接院と號す。東都增上寺の末にして淨土宗なり。阿彌陀佛を本尊とす。

坂本町

古の名を其の儘の町に入れば右側に歡喜樓あり、幾多の噴水家を圍みて清涼比なし蕎麥、心太は此の樓獨特のものにして年々京濱人士の賞贊を博す。更に登れば瀧あり、元瀧といふ。

●元瀧　高さ一丈三尺、巾一丈餘、水頗る清烈にして涼亦甚だ深し。瀧の上に不動の石像を安置せるが故に又不動瀧ともいふ。全山清瀧四ケ所（大瀧、新瀧、良辨瀧、元瀧）の中最も上に位し、本坂に近きを以て登山者は多く此の瀧によりて身を清む境内に瀧之宮神社あり、もと飛龍權現と稱せしもの是なり。瀧守は武榮太夫氏なり

追分社より下社に至る

●追分社　大山町を過ぎて雲井橋を渡り更に登れば路は左右に分る、左を女坂とし右を男坂となす。一社此の間に介在す。八心思兼神社といひ、同名の神を祀る、追分社は路の追分にあるよりいふなり。維新前前不動と稱せしところ、稍左に不動の瀧跡あり。

一　男坂（之より登るを順とす）

鐵鎖によりて登るべし、是より頂上迄二十八町、十八町にして下社に至る。女坂に比して甚だ近し。

肌ぬぎて登る道者の掛聲に鎖の紐の下がる大山

二　葉

男坂は古の本路にして急峻甚しく、岩石峨々として歩頗る危し。或は巨巖前に横はり、或は頭上を壓す。左右は萬仞の絶壁にして小徑此の間を通じ、末社諸處に點在す。

●兜石　五丁目と六丁目との間、末社宮比神社の上にあり。

●夷石　兜石と相對せり。共に自然石にして名は形狀より出たりと云ふ。

●雷山　登路の右方、大壑を瞰つて巨人の如く立てるもの即ち之にして山骨の露出せるもの風伯雨師の奇工に遭ひて刻錯妙を極め、其の間倭松、楓樹相交生す。秋季紅葉の美甚だ賞すべし。頂上に雷山神社を祀る。古は此の山に登る者必ず震死すと傳へたり。

腰押やかゝる岩根の下もみち　一　茶

●蝙蝠岩屋　雷山の麓にある岩窟なり、幽深究むべからず。蝙蝠常に群棲すといふ。

●八段瀧　雷山の西麓にあり。二重瀧の下流にして一面の岩石水流の爲めに自然に八段の瀧をなす。風景頗る賞すべく又納涼に適す。

●對面石　開山良辨、其の父染谷太郎大夫時忠と對面せし處の石なりと、十三丁目、白雄の碑の傍にあり。

追分社より路を左にとりて眞玉橋を渡り、右に數十丈の溪を見て紅葉橋を越ゆれば、人家漸く盡きて深山の空翠身に冷なるを覺ゆ。

●●●　爪切地藏　紅葉橋より一丁上にあり、大自然石に地藏の座像を彫付けたるものにして弘法大師が其の爪を以て作りたるものなりと傳ふ。

●●●　前不動　固と來迎院と稱し、大山寺十二坊の菩提寺たりし處なるが、神佛分離の際今の追分社にありし不動の立像を茲に移して前不動と稱せり。正面の堂宇は則ち是なり。堂前茶店ありて團子を鬻ぐ、購ひて之を投ぐれば群犬爭ひ來り喰ふ。宛として淺草寺の鳩の如く、大山の一名物たり。

鹿やせて餅喰ふ犬の毛並かな　遠水

●●●●　俱利伽羅不動　前不動に向ひて左側にあるもの之なり、俱利迦羅不動の像を安置す

●●●●●●　明王寺事務所　前不動堂の右側にあり、明王寺一切の事務を司る。護摩を乞ふものは亦此處に至るべし。

●●●　寶医塔　事務所前にあり、青銅にして總長三丈三尺三寸、中に四天王の像を安す、寛政七年十一月の鑄造に係り稀有の珍品たり。而して一度之を拜するものは八十億劫の生死を脫すべしといへり。もと今の下社にありしを神佛分離の折こゝに移せしが之を組立つるに數千圓の費用を要するより今猶雜然たるまゝ雨露に曝せり。

●●●　不動堂　前不動の後坂を攀ぢて至るべし。寶珠山明王寺と號しもと雨降山大山寺と呼びて今の下社の地にありしものなり。南都東大寺の別當良辨の開基にして聖武天皇の勅願寺たり。明治六年假に今の前不動の地に移せしが遂に九年今の地を相して工を起し、十七年一月上棟式を擧げ、翌年十一月廿一日入佛式を終はる。其の間實に九年、空前の大事業たり。間口九間奥行八間半、銅葺屋根にして彫刻色彩の美頗る淡雅にして崇嚴人を魅し、比來增築成りて又一層の美を添へたり。地を八幡平と

云ひ、昔修驗者の住せし處にして今の長坂の四周には來迎院の墓地ありて玉垣長堵整然として甚だ見るべきものありしといふ。

本尊は不動明王にして閻浮檀金の座像なり。御丈三尺二寸五分、中興願行上人江の島辨財天より賜はりし黄金を以て作れるものなりといふ。猶此の外に良辨作の不動明王の木像、兩童子、四大明王、金剛界大日如來、等の諸佛を安置す。境内に芭蕉翁追福の碑ありて『雲をり〳〵人を休むる月見かな』の句を題す。廻廊に倚りて浮嵐に大呼すれば空翠自ら動き、南の山峽遙に江島を望むべし。

●大佛　堂の右側の崖下にある大石の層塔之なり。水戸公の子隆慶、八大坊二世として當山に來るや、其の母の爲めに之を建て以て日夕禮拜したるなりといふ。

●無明橋　昔は橋上にて言を發するを禁じたりといふ。故に又無言橋ともいへり。紅蔦欄に古りて步顚る危し。傍に碑ありて、桃青の句を刻む。

山寒く心の底や水の月　ばせを

●半面石　登ること僅にして右側にあり。自然石にして岩皺人面をなし、其の半面を土中に埋めたり。

●上屋敷跡　迂曲して猶登れば男坂よりの道と相會す、近傍稍々開けて日露戰役紀念碑あり、往時全山に絕對の權威を有せし大山寺別當八大坊(寺名)の跡にして上屋敷といへるもの是なり。石に踞して眼を放てば房總の長嘴遙に雲烟模糊の間に落ち、湘海一帶の長汀曲浦に泛ぶ白帆の影より、浪に動かぬ江島、大島に至るまで一々指點すべく、相摸平野の人煙續々として朝するが如く裾周の諸山大山町の長街を挾んで互に方圓の妙を盡くす。

●尾卷石　中興願行上人不動明王の像を鐫んとして黄金を江島辨財天に請ひしとき辨天蛇體を現はして山を七周したりしが其の尾恰も此石に至りたりといふ。

●倉見坂　東京早稻田の講社か建設せし紀念碑のある處の坂なり。傳へいふ倉は谷の意にて此の坂より前山の谷を望み得といふより此の名ありと、此の附近は往古十二

坊が各々壯麗を競ひし坊舍の並びし地なり。

（是より二重瀧を後にして直ちに下社に詣づるも可なり）

●●二重瀧　路の右に鳥居あり、傍に二重瀧入口の標石を見て瀧に至るべし。道の左右櫻樹頗る多し。

花曇櫻の雲の袖合羽わふりの山に誰か着せけん　公彦

山の名の雨は降らずて櫻陰霑るゝは嬉し花のかげより　松旭亭

其の高さ三丈六尺、巉岩四圍に屹立して瀧は分れて二條となる。良辨開山の爲め此の瀧に詣でし時、山大に震ひ雷電灼爛、瀧浪大に激すと見れば大蛇浮び出でゝ逆鱗を逆立て之と問答をなせりといふ。亦不增不滅の瀧と呼ぶ。

●●電瀧　二重瀧の前に橋あり、橋下に又瀧あり、之を電瀧といふ。高さ四丈四尺、巾六尺瀧の前に方丈の石あり。浪の表を挾んで苔を生ぜず。石面の粧銀鐐の如し、名けて御座石といひ、龍神の座せしものなりと傳ふ。

●●咀杉　二重瀧の傍にあり、當山の神木にして周圍二丈稀代の老樹にして下部は大なる洞穴をなし、神戸ありて開かず、古より丑滿の眞夜中に白衣の人、人形を打付けて咀るといふ。四邊晝猶暗く釘痕歷々として鬼氣人を襲ふ。

●●二重社　咀杉の傍にあり、攝社にして高龗大神を祭る。疾病其の他九死に際して此の神に祈れば必ず靈驗ありとなし祈禱を乞ふもの多し。之を『二重祈禱』といふ。又雨乞に來るもの甚だ多く、皆二重瀧の水を神前に供へ祈禱の後之を持歸りて水に和し村中に注ぎあるくなり。此の水を持つ者途に泊るときは雨其の地に降るといふ。

附近老樹密生して幽禽時に囀じ人跡甚だ稀なり、前は羊腸の險路を以て日向に至るべく途に昔中興願行上人が鬼と會せしといふ鬼逢坂あり、これを『日向越』といひ維新前はこれより登山するもの多かりしといふ。

あふり山名のみに霽れて麓なる日向の山にかゝる夕立　麥成

之より日向越を辿りて阿夫利神社下社に至るべし。

下社より頂上本宮に至る

●下社　一に拝殿といふ。大山祇命、大雷神、高龗神を祭り、日吉神社、淺間神社を相殿とせり。此の社より上は大祭以外に常人の參詣を許さず。

現在の社殿頗る莊嚴を極めたれども安政年間炎上してより假りに造營したるものなれば規摸猶小にして神事の執行其の意を得ず、殊に近時參詣者の增加に伴ひて之れが取扱上不便を感ずること漸く多くなれるより、拾萬餘圓の大工事を起して之が改築の計畫成り、四月九日起工式を行ひて目下着々進渉の中にあり。各種の祈願祭典の執行等凡て此處にて取扱ふ。

地はもと雨降山大山寺のありしところにして、今の不動明王をも合せ安置したりしを明治六年に分離したるなり。境内に盥嗽所、大鳥居、能樂殿、神輿舍等あり。茶店も亦二三あり、以て憩ふべし。

●力鈴　人の之れを抱き振つて其の力を試むるもの、大小三あり。一度之れを振れば鏘然として鳴り空山に明響して神嚴いふべからず。

●腰掛石　社殿の裏にあり、日蓮上人登山の折、此石に憩へりと傳ふ。今近傍に色變の葦を生ずといへり。

此處より秦野を經て富士に至る道あり、名けて『簑毛越』といふ。

●神門　下社の西北にあり、頗る嚴にして本宮に至るべき關門なり。每年大祭の時は東京御花講の來り開くを待ちて衆人參詣す。之を稱して『山開』といふ。これより本坂と稱し十八町にして本宮に至るべく、山路極めて險、鐵鎖によりて攀づべし。之より上は地下に白紙を敷きて便をなすを例とせり。然らざれば山大に荒るといふ。

●鳥居杉　本坂一丁目にあり蟠々たる老杉路を挾んで鳥居の狀をなす。周圍共に二丈餘、傍に白山社あり。

●遙拜所　鳥居杉より數間上にあり、維新前は婦人の頂上に至るを禁じたるが故に、婦

人は此處にて遙に本宮を拜して下山したるなり。（今は婦人も登山す）

之より路いよ〳〵險しく樹下暗々として悽愴の氣人を襲ふ。十六町目に至りて『簑毛口』よりの山道と合すこれより登れば寒風愈々肌を刺し、寂寞太古の想あらしむ

●來光谷　二十町目、左側にある谷なり、銀雲常に群りて其の深さ幾何なるを知らず朝夕の日光之れに映ずれば五彩の綺布縷々として現れ、暫くにして紫雲に變じ奇觀いふべからずといふ。

●緣結樹　未婚の男女、其の懷へる者の名を記したる紙を小指と拇指とにて此の樹に結ひ付け、其の首尾よく結ばるゝを以て願叶へりとするなり。來光谷の傍にあり。

●御供水　二十四町目にあり。湧泉にして大旱といへども涸るゝとなし。常に之を汲みて供御とするよりいふ。此の水よく諸金屬を溶かすとなし指輪の手を入るゝを禁せり、金屬を入れたる年は其の夏涸滅すといへり。

●刈廻　二十八丁目頂上の鳥居より道は左右に岐る、巾共に一丈餘、山頂を一周すべし。古來火の本宮に至らんことを懼れて草木を刈廻し來りたるより成れるものにして刈廻といふ。步に從つて奇佳絕景悉く身邊に集り、石を朶む岩壁を探りて至るべく、處々に鐵鎖あり、其間頗る危險にして落下せる大小の石を犯して之を過ぐる外一の考も一の視線をも放つ能はず、不幸にして一步を誤らんか身は正に千仞の谷底に粉碎せらるべきなり。登山者はよろしく一周以て其の膽を試むべきなり。

●前社　花崗岩の鳥居を入りたる所にあり、維新前『小天狗』と稱せしものにて、今は高於賀美神と號せり。高靇神を祀る。

●本社　絕頂に位す、阿夫利神社の本宮にして、國家年穀の豐かならむことを祈るべき大山祇命を奉祀す。

今の社殿は明治十四年の建設に係るものなれども、遠く一千二百餘年以前より東西諸人の信仰を享くること深く、現に數百の講社と數十萬人の信徒とを有し延喜式內の神社たり。

征夷大將軍源頼朝社領を寄附せし以來代々源氏の祈願所となり、關東の諸將亦之を崇敬すると深く、徳川氏の時に至ては特に黒印、朱印の地を下して之れか營繕の途に當てられたり。明治六年神佛分離の令により始めて良辨以後の合宗を脱し、遂に獨立して舊に復し、今は鄉社を兼ねて縣社に列せられ神徳愈々旺なり。毎年例祭（附錄參照）には數十萬の信徒雲の如く集り來り滿山之が爲に埋めらるゝの感あり。

●●●雨降木　本社の前、石階の左側にあり。當山の神木にして齢幾千年なるを知らず、雲霧深きときは枝葉より露の滴下すること雨の如くなりといふ。

●●●奥社　一に奥の院と稱す。維新前『大天狗』と稱へしものにして大雷神を祀る。以上の三社を合して阿夫利神社と稱し、維新前は之に明王寺其の他全山の神社、佛閣を合せて大山寺と呼べり。

相州大山案内記　畢

附錄

登山者注意（男坂より登山し女坂を經て下山すべし。）

物に序ある如く登山するにも亦夫々の準備なかるべからず、大山は富士の如き大規模のものにもあらざれば、戸隱、槍ケ嶽等の如く甚しく險阻なる山にもあらず。加ふるに山中の設備具はり、交通亦便利なるを以て參詣以外に初めて登山を試みんとするもの、博物を實地に研究せんとするもの及び紅塵を避けて秋の數日を獵に暮さんとするものには殊に適當の處たるを信ず。

然りと雖も兎に角四千尺以上の高峯なるが故に山中また多少の注意を要す。

狩獵を目的とするものは其の時季に從ふを良しとすといへども九月に擧行さるゝ秋季祭の大典を拜しながら至らんは極めて妙なるべし。其の他のものは春、夏二季を選ぶべく、殊に靈山の凉味を味ひ、人界の夏を忘れんとするものは所謂夏祭（七、

八月)を利用して登山すべきなり。

七月八月は夏季大祭を執行せらるゝが故に新橋、國府津間には臨時汽車發せられ、人力車夫の如きは故らに東京、横濱等の各地より集り來るが故に途上の不便殆どなく、乘合馬車は特に數回の增發をなし之れが便に供ふ。

一日にて登山を終らんとするものは少く共正午迄に大山に至らざるべからず。其の否らざる者にして東海道鐵道に倚るものは午後四時頃迄に平塚に着し、之れより人力車、馬車により或は夕暮の野原を賞しつゝ伊勢原、若しくは子易、大山に至りて一泊し、荷物を托して翌朝未明に登山し、更に宿に戻り、晩涼を待ちて歸路に着くを可とす。夜二時頃より宿を出でゝ登山すれば人界に見るべからざる『御來光』の壯觀を見るを得べく、夜明けて下山すれば暗夜の中に登りたる險路に驚くべく、宿に着きて一睡すれば『今朝試回首、不辨昨登山』の感を深うすべし。但し此の場合には豫め毛布の如き防寒具を携ふるを要す。蓋し頂上の寒氣堪へ難ければなり。

白晝登山せんとするものは必ず日覆、汗拭、水等を用意すべし。烈しき日光は到底吾人の堪ふる處にあらず、且つ之れが爲めに動もすれば、水、氷等の過用を來し不測の病を獲るもの頗る多ければなり。

愈々山中に入りたるときは坂を斜に靜に上るべく、又諸處にて休憩するを要す。下山の時には勢に乘じて馳け下るものあれど深く戒むべきことにて、僅にして足慄みてまた歩む能はざるに至るべし。普通にして登り一時間に對して二十五分の割合を以て下り得べきが故に土產等の選擇に托して除々に下るべきなり。登りて直に濕に入るものあれど是れ又衛生上甚だ宜しからず、少く共三十分間休憩して十分汗の去りたる時に於てすべし。下祉より上に卵、鮨、心太、菓子、ラムネ、饅頭等を商へる茶屋多けれども多くは高價にして水の如きも一杯五厘以上を價す。之れ遙に麓より運ばるゝが故に當然の事なりといへども、卵、鮨等の中には往々にして腐敗せるもあるを以て成るべくは之を避くるを要す。但し水は皆清烈比なく、渴ける口に

は千金も措しからざるなり。

登山者は一般に輕裝を良とし、必ず笠、帽子、杖、紙、賓丹等を携帶すべく、殊に大切なるは一文錢もしくは五厘錢の用意なり、山に入ること一歩にして忽ちにして散じ盡くすに至るべし。猶一人の登山は危險多きが故に必す二人以上にてなすべく、道中の興も亦從つて甚だ深かるべきなり。

先導師の所管に係る府縣（別表參照）よりの登山者は先づ之れにつくを便とす、（後記先導師の條參照）其の他の者にして一日に登山を終らんとするものは大山町の旅館、茶亭につくを便とす。土産はなるべく上に於て求むべく之には繪はがき、寫眞帖、玩具、挽物細工、生茸、岩松等あれど就中繪葉書、寫眞帖の如きは靈山の名勝を美麗に表はせるが故に土産として最も適當なるものならん。挽物細工、玩具は殆ど倍の掛直あるを以て殊に注意するを要す。こは大山の名物にて、而して此の習慣は山中山下此の二者の外に出でざるなり。

里程、旅費

東京より平塚停車場迄	約十五里	汽車三等	六十五錢
停車場より伊勢原町迄	約二里	馬車 二十錢 人力 三十五錢	內外
伊勢原町より明神前迄	約二里	馬車 十錢 人力 二十錢	內外
明神前より追分社迄	約廿五町	山駕 一圓乃至二圓	
追分社より下社迄	十八町		
下社より頂上本宮迄	十町		

而して平塚、伊勢原、子易、大山を通じて各旅館の宿泊料三十五錢乃至一圓なるが故に土産物、其他の費用を合算して僅に四圓內外を以て東京より一泊の淸遊を試み得べし。

先導師新舊名對照表

登山者は先づ此の表によりて其の所屬先導師の新、舊名及所在を知るべく、猶登山して不明なるものは社務所につきて承合すべし。

所屬府縣	舊名	新名	所在	備考
東、神、埼、千、茨、山	大木利太夫	大木齋次郎	新町(右)	
東、神、埼、千、靜	和田岩太夫	和田米次郎	同上(右)	
東、埼、神、群、千	宮本平太夫	宮本芳雄	同上(右)	
同上	小川監物	小川大海	同上(右)	
東、神、埼、千、茨	成田縫殿之助	成田民雄	同上(右)	
東、神、埼	鈴村定人	鈴村武治	同上(右)	
東、神、埼、千、群、茨、栃	和田圭水	和田八束	同上(右)	小川華人ヲ兼ヌ
東、神	安田寛太夫	安田義治	同上(左)	
東、神、埼、千、栃、靜	內海式部太夫	內海浦治	別所町(右)	菅木茂ヲ兼ヌ
東、神、埼、千	內海三太夫	內海三平	同上(左)	

同	上	反田松太夫	反田仙太郎	同上(左)	高橋七郎ヲ兼ヌ
東、神、	靜	中山內記	中山政雄	同上(右)	
東、神、靜、山		金子宇內	金子道男	同上(左)	
東、神、埼、千、群、茨、栃		高尾左仲	高尾幸弓	同上(右)	
群、	千	新宮數馬	新宮眞由美	同上(右)	
東、神、千、群、埼		善昌坊	內海景弓	同上(左)	
東、神、千、栃		須藤內膳	須藤內丸	同上(右)	
東、神、千、山		和田增太夫	和田增藏	同上(左)	
東、神、埼、茨、栃		笹子嘉太夫	同上覆橋上(右)		
東、神、	千	笹子稻尾			
東、神、埼、千、茨、栃、山		村山八太夫	村山千秋	同上(右)	
東、神、千、山		內海刑部太夫	內海政雄	同上(右)	山田平馬ヲ兼ヌ
東、神、茨、靜、栃、福、群、山		萬善坊	沖津清一郎	同上(右)	
東、神、埼、千、靜、茨		沼野嘉內	沼野嘉內	同上(左)	
		增田源之進	增田耕三	同上(左)	銚子坊トモ云フ

東、神、埼、千、山	神崎半太夫	神崎錡三郎	同	上(右)
東、神、埼、千、茨、栃	瀧淵坊	武田水穂	同	上(左)
同　上	岡田伊太夫	岡田稻置	福永町(左)	上(右)
東、神、埼、千、靜、山	今坂德之進	今坂銀次郎	同	上(右)
東、神、千、茨、靜	佐藤八百會	佐藤八百會	同	上(右)
東、神、靜	石井長太夫	石井伊之吉	同	上(左)
東、神、埼、千	和田靭負	和田周次郎	同	上(右)
神、埼、群	太田丹後	太田眞垣	同	上(左)
東、神、埼、千、栃、靜	神崎富太夫	神崎富江	同	上(右)
東、神、埼、千、靜、山	原田平陸	原田平陸	同	上(右)
東、神、埼、茨、山	逸見民部	逸見民衛	同	上(左)
東、神、埼、群、千、栃、靜	小笠原右京	小笠原信太郎	同	上(左)
東、神、埼、群、茨、栃	小林甚太夫	小林勝哉	同上新瀧上(左)	

（沼野播部ヲ大瀧ノ持主ナリ、故ニ家ヲ大瀧トイフ。）

（佐々木文太夫ヲ兼ヌ）

（逸見舍人ヲ兼ヌ）

（瀧田德太夫ヲ兼ヌ）

神、埼、千	内海兵部太夫	内海渚	同	上(左)
東、神、埼、千、靜	佐藤與太夫	佐藤蔦雄	同	上(左)
東、神、埼、千、茨、栃、靜	岡部岡太夫	岡部守見	同	上(左)
東、神、埼、群	村井彌太夫	村井眞名水	同	上(右)
東、神、千	大谷安之進	大谷賢治	同	上(左)
東、神、埼、群、千、茨、栃、靜	奥村三郎太夫	奥村三郎	同	上(左)
東、神、千、茨	目黒久太夫	目黒和三郎	同	上(右)
東、神、埼、千	相原主殿	相原武夫	同	上(右)
東、神、埼、靜	相原但馬	相原秀美	同	上(右)
東、神、埼、群、山	丸山要輔	丸山安治	開山町(右)	上(右)
東、神、埼、群、千、山	永野重太夫	永野染司	同	上(右)
東、神、埼、茨	藏全坊	三橋玉城	同	上(右)
東、神、埼	津田武太夫	津田茂穗	同	上(右)
東、神、埼、千	常歡坊	三村深雪	同	上(左)

東、神、埼、千	吉川領太夫	同	上(右)			
東、神、埼、靜、千	尾崎主計	同	上(右)			
東、神藤之坊	龜井正繩	同	上(右)	風俗紊亂ノ廉ニテ主人ヘ引渡		
東、神、埼、千、茨、靜	若滿坊	二階堂若滿	同	上(左)		
東、神、埼、千、山	水島內匠	水島長次郎	同	上(左)		
東、神、埼、靜、山	大木宮內	大木宮雄	同	上(左)		
東、神、千、埼	佐藤大住	佐藤元衛	同	上(左)		
神、埼、群、靜	大藤玄蕃	大藤誠一	同	上(左)		
神、茨、山 東、神、埼、千、茨、靜、福 群、栃、長	下山治郎太夫	下山眞澄	同	上(左)		
東、神、埼、千、茨、群、靜 千、群	佐藤主水	佐藤速水	同	上(右)	太田菊太夫ヲ雇ヌ	
東、神、埼、千	古宮幾太夫	古宮惣左衛門	同	上(左)		
東、神、埼、千	吉祥坊	眞理谷金三郎	同	上(右)		
東、神、埼、千	源長坊	眞理谷源長	同	上(左)	長野仁太夫祐泉坊ヲ雇ヌ	
東、神、千	佐藤織部	佐藤政太	稻荷町(右)			

東、埼、群 東、神、埼、群、千、栃、山	猪俣儀太夫	猪俣守衛	同	上(左)		
神、埼、群 神	青木將監	青木輝馬	同上千代見橋上(右)		成田庄太夫ヲ雇ヌ	
神、埼、群、千	眞下多宮	眞下宮城	同	上(右)		
神、埼、群、千	和田官太夫	和田鄉見	同	上(右)		
神、埼、群、千	和田仲太夫	和田豐丸	同	上(右)		
神、東、埼、千	和田銀太夫	和田早苗	同	上(右)		
神、東、千、茨、靜、長	正本坊	淺田年名	同	上(右)		
神、東、千、茨、栃、福	加藤林太夫	加藤磐門	同	上(左)		
東、神	井上久太夫	井上榮造	同	上(右)		
東、神、埼	佐藤津太夫	佐藤重作	同	上(右)		
東、神、千	內海勝太夫	內海力藏	同	上(右)		
神、埼、山	佐藤大學	佐藤大學	同	上(右)		
神、埼、千	小川大膳	小川和賀志	坂本町(右)			
東、神、千、茨	根岸權太夫	根岸已惠藏	同	上(右)		

神、千、埼、茨	箱崎佐太夫	定正	同 上(右)
東、埼、神、山	內海平太夫	同	上(左)
東、神、靜、埼、山	武榮太夫	同	上(右)

▲表中東、神、千、埼、茨、栃、群、福、靜、山、長とあるは東京府及神奈川、千葉、茨城栃木、群馬、福島、靜岡、山梨、長野縣の畧なり。

▲右、左とあるは先導師の住宅の位置を示せるものにて登り右、左の意なり。

阿夫利神社祭日

第一恒例祭

一月一日　新年祭
同　二日　同
同　三日　元始祭
同　四日　社務所事務始め　奉告
同　七日　筒粥祭　同夜引目祭

二月四日　新年祭
二月十一日　紀元節拜賀祭
三月一日　神事能
四月十四日　雷山祭
同　十五日　春季祭開扉祭
同十五日ヨリ廿四日迄十日間　春季大祭
同　廿四日　春季祭閉扉祭
六月三十日　大秡　鎭火祭
七月廿七日　大祭開扉
七月廿七日ヨリ八月十七日迄　夏季大祭
八月十七日　大祭閉扉
八月十八日　二重社祭
九月八日九日十日　秋季祭　神輿渡御　能樂神樂其他餘興執行
十一月三日　天長節祝賀祭
十一月廿三日　新嘗祭

石森多根尾ヲ雖子元潤ノ持主ナリ故ニ家ヲ元潤トイフ。

十二月廿八日　大祓　鎭火祭
十二月卅一日　除夜祭
月　次　祭　連月一日十五日
大祭日即ち孝明天皇祭　春秋二季の皇靈祭　神嘗祭　神武天皇祭等は公式祭とし
て夫々祭典あり

第二　臨時祭

大御神樂　特等　一等　二等　三等の四種あり
鎭魂祭　一等　二等　三等の三種あり
引目祭
奉幣式
御饌供
以上は願主の請により執行するものにして受持先導師は各種の斡旋をなすもの
なれば先導師に交渉するを便とす

附錄畢

明治四十年四月二十日印刷
明治四十年四月廿五日發行

版權所有
不許複製

著作者　神奈川縣中郡伊勢原町二百九十一番地　川戸藤吉
兼著者　東京市神田區皆川町二番地　田村茂太郎
發行印刷兼　東京市京橋區日吉町四番地　民友社
印刷所
發行所　東京市神田區皆川町二番地　田村書房
大賣捌　神奈川縣中郡大山町登り左側　遠州屋善藏

御目印

旅館 目印

大勉強御休泊

御手輕專一

相州中郡大山町稻荷町

平野屋太郎兵衛

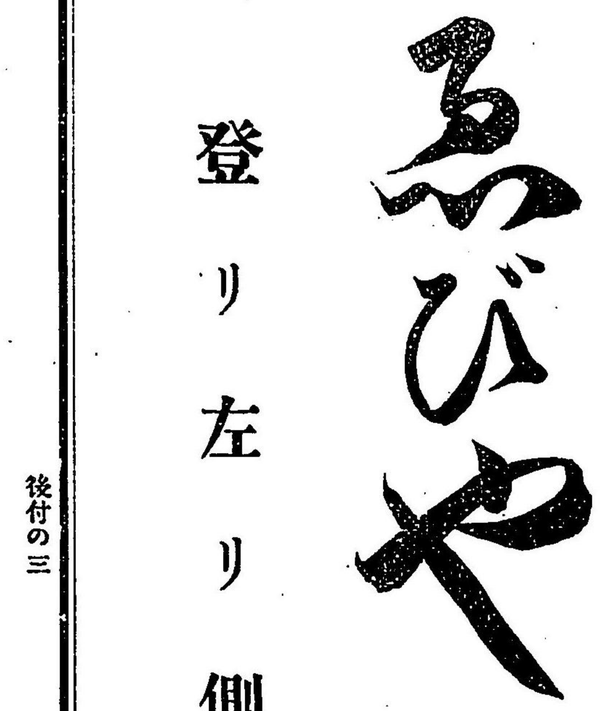
◉御投宿御出立共夜中何時にても御差支無之可仕候

後付の一

相州大山 旅館

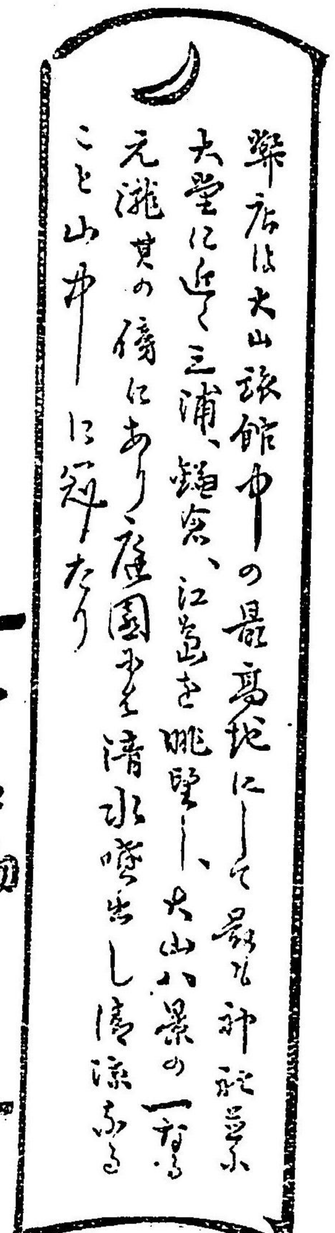
大勉強

子易明神前



登リ左リ側

後付の三



驛舍は大山旅館前の最高地にして最も神社に
大堂に近く三浦、鎌倉、江島を眺望し、大山八景の一なる
元滝其の傍にあり清水噴出し清涼ふる
こと山中に冠たり

後付の二

御旅館

後樓山水ありて眺望頗る
絶佳、湯澁ありて親切低廉
を旨とす。

伊勢原町上町
大神宮前

玉川彌右衛門

旅館御料理店

着實なる應對と自
慢の庖丁とは弊店
の特色！

伊勢原町仲町

小宮淺次郎

大勉強

仕出し

旅館御料理

大勉強

伊勢原町下町
警察署隣

伊勢屋作右衛門

大山登り左側

座敷増築致し候に就いては一層叮寧親切に御取扱申上候

旅館

相州中郡伊勢原町

（上リ右側）

まつや荘左衛門

弊店は特別叮嚀を旨とし御手輕專一に御賄ひ仕候

御旅館

相摸平塚町

八幡神社前際

魚屋甚太郎

◉停車場へ半町

御旅館

御料理

相摸平塚停車場前

◉銃獵御案内

◉相摸川鮎獵御案内

松本千代造

新開講社

旅館御料理

相摸平塚停車場前

大山へ登リ右側角

内河源次郎

後付の八

旅人宿

御手輕

御畫食

御料理

平塚停車場前

左側

奮屋磯松

◉馬車人力車廉價に御案内申上候

後付の九

東海道平塚停車場前東側

平塚海岸御案内

大山御參詣御休泊

旅館

富士見屋仲治郎

大勉強御手かる専一尚丁寧に御取扱可申候

大山登リ右側

元瀧

登山者

きよめ所

遠江駿河　相模

東京武藏　講社信徒取扱

大山神官

武榮太夫

大勉強

伊勢原大山道

（登り左側）

講中御休憩所

あかさか茶店

高梨ゆき

大山道

大野村中原上宿

講中御休所

見晴屋金太郎

家傳婦人諸病治療

醫療でありませぬから藥は用ひませぬ。針もまじなひも灸も一切用ひませぬ。只按腹するのです。按腹すればどんな婦人の病でも輕きは一週間。重きも四週間で全治致します。

伊勢原町仲町

島屋たか

江之島旅館

藤澤停車場より

電車の便あり

さかゐや

ふじすや

北村屋

金龜樓

岩本樓

さぬきや

江どや

新式マッサアヂ治療

最新式の技術により專ら西洋按摩術と電氣療法とに從事す。

伊勢原町上町

鍼治醫 菊地銀之

登山紀念寫眞撮影

登山諸賢の爲めに最新式の早取寫眞仕り候間登山紀念として續々御撮影の程願上候。

大山町子易明神上

熊澤寫眞店

後付の十四

大山旅館

子易明神前

かみや九兵衛

詣參

館

親切低廉後庭の築山亦元祿の粹を聚めたり。

前附第一

大勉強

相州大山登り右側本店

伊豆屋群藏

同所登り右側本店ヨリ二軒目橋際

伊豆屋支店

御旅館附言

諸事改良ヲ加ヘ旅客ノ御便宜ヲ旨トシ百事懇切ニ御取扱可仕候

相摸大山町のぼり左りがは

大勉強旅館

大まや菊次郎

弊舎裏庭には大山有名なる大瀧の末流小瀑布あり、夏時は最も清涼にして清風盃盤の間に充ち候へば御登山の節は何卒御投宿あらん事を願上候

相摸大山町のぼり右がは

大勉強御手輕專一

旅館

たばこ